

### 『教員の仕事』

未だかつてなかったほど、今、「教員の仕事」の在り方が注目されています。国が「働き方改革」を強力に推進しており、ついに学校現場にも具体的な改革の波が押し寄せてきました。これらの動きは、私は、基本的には好ましく捉えています。

例えば、夏季・冬季休業中の学校閉庁日の設定や部活動に係る練習時間の制限及び休養日の設定は、とても具体的で目に見える改革だと思えます。

これまでも、教員の長時間労働は問題視されており、北海道においても「教育職員の時間外勤務等の縮減に向けた取組」が進められています。

見学旅行の引率に伴う勤務時間増、運動会・学習発表会のための準備に伴う勤務時間増、家庭訪問や個別面談に伴う勤務時間増、登校時の安全指導（早朝の勤務時間前の業務）による勤務時間増等をフォローする制度（平たく言うと、多く働き過ぎた分をどこかで勤務時間を短くしたり勤務なしにしたりする制度で正式には「変形労働時間制」や「週休日の振替」「勤務のスライド」と言います）が定められたことは、大きな前進だと思っています。これらの制度が有効に機能するためには（ちゃんと計画通りの勤務ができるようにするためには）、課業日（子どもが登校し授業を行っている日）に、誰かが休んだり早めに退勤したりしても、教育活動や学校の業務に支障が出ない態勢が学校現場に整っていることが必要不可欠です。そのために、職員間の意思疎通を密にしつつ、互いに先を見通した仕事をし、計画した日や時間は、気持ちよく「勤務なし」にできるようにすることがとても大事であり、各学校での知恵の出どころでもあります。

ただ、制度的には改善されても、教員の仕事の現状は、まだまだ厳しいものがあります。

「教員の仕事とは何か？」と問われたら、「子どもの命を預かり、子どもの成長を促す仕事」だと押さえています。その中核は、「授業」を通して子どもを育てることです。純粹に「授業だけが教員の仕事」となれば、日本の教員も随分とゆとりがでてくるだろうなと思いますが、現状はそうではありません。

例えば（それなりの規模の学校で多くの教員の場合を想定）、小学校の教員の場合（特に学級担任）は、子どもが登校してから下校するまで、基本ずっと子どもと一緒にいます。休み時間や授業と授業の間の時間は、教室で子ども達の様子を見守っています（次の授業の準備や提出物の点検もままあります）。子どもの安全確保と「いじめ防止」のため

です。お昼は「給食」ですが、この時間帯は、休憩時間ではありません。「給食指導」と呼ばれ、給食当番という組織を作り、衛生的で効率的な給食の準備や後片付けができるように指導しています。もちろん食事の基本的なマナーも指導します。給食の後に「歯みがき指導」等を行う学校もあります。昼休みなどは、体育館やグラウンドで、教員が交代で子どもの様子を見守ります。「帰りの会」が終わると「清掃指導（お昼に一齐に行う学校もあります）」があります。これが終わると子ども達は下校となりますが、曜日によっては、さらに「放課後学習」に取り組む学校が多いです。子どもが完全に下校するのは、午後3時30分頃でしょうか。

定められた教員の休憩時間は、多少の差はありますが、午後3時40分頃から午後4時25分頃までの45分。しかしながら、純粋に休憩している教員は皆無と言っていいでしょう。近くの金融機関に私用で行く場合もありますが、それ以外は仕事をしています。多くの場合、ここで、集金の処理や各種提出物の点検、学級通信の作成等を行っています。ここに様々な会議や打ち合わせも入ります。生徒指導上の問題が発生すれば、その対応のための会議が優先的に入ります。その後、指導の一環としての家庭訪問等の保護者対応が必要となれば、夜の7時、時には8時・・・となります。

教員の勤務時間は、だいたい午後4時30分頃までですので、定時の退勤は、ほぼ「無理」と言うのが私見です。むしろ、ここからの1時間ないし2時間程の中で、ようやく落ち着いて家庭学習ノートの点検（コメントを書き入れることも）等の業務や学校全体に関わる業務（行事や学校全体での取組）推進のための計画資料作成、そして明日の授業の準備が行われます。子育て中の教員は、遅くまで残って仕事はできませんので、途中で切り上げ家に持ち帰って、夜遅くもしくは早朝に仕事をしています（ちなみに持ち帰り業務は、時間外勤務にカウントされていません）。

中学校は、「空き時間」に仕事ができたり（学校が安定していればの話です）、副担任の教員と学級実務を分担したりすることができますが、部活動が加わります。私も経験がありますが、中学校は部活動が終わって夜の7時頃からやっと落ち着いて授業の準備や自分が担っている業務に取り掛かれるという感じでした。

「教員の“働き方改革”は、今、取り組まなければ、今後二度とできない！という切迫感と覚悟を持ってやらなければならない。キーワードは、“時間管理の徹底”“事務業務の軽減”“授業準備支援”“部活休養日の徹底”」と、ある県教委の担当者は語っています。また、「ICT」の活用は有効との見解をよく見聞します。

学校は「ビルドは得意だが、スクラップが苦手」と、よく言われます。その通りだなど私も思いますが、教員の心身が健康でなければ、質の高い教育は期待できません。気持ちにも体力的にも、少しでも今より余裕を持った状態で子ども達と向き合えるようにするために、「減らせること、止められることはないか」、「丁寧過ぎてはいないか。もっと効率的にできないか」「こんな協力は受けられないか」など、校長のリーダーシップの下、他人任せではなく、「自分事」という意識で、「業務全般の見直し」と「業務遂行に対する意識改革」を進めていかなければならないと考えますし、絶好の機会と捉えています。